

自己欺瞞のパラドクスと自己概念の多面性

金杉武司 (Takeshi KANASUGI)

高千穂大学

「自己欺瞞」と呼ばれる現象は、標準的には、文字通り「自らを欺くこと」として理解されてきた。つまり、自己欺瞞の主体は、「P」が偽であることを正当化する証拠をある程度所有していて、それゆえ P でないという信念 $B(\neg P)$ を所有しているにもかかわらず、P であってほしいという欲求 $D(P)$ によって動機づけられて、意図的に自らを欺き、P という信念 $B(P)$ を形成する（そして、それを保持する）と理解されてきた。

しかし、この標準的理解は、まさに以上のように自己欺瞞を理解するがゆえに、二つのパラドクスに直面すると言われる。以下では、A・メレにならない、それらを「静的パラドクス」と「動的パラドクス」と呼ぶことにする。

まず、静的パラドクスとは、互いに矛盾する信念 $B(P)$ と $B(\neg P)$ を同時に所有しているということがいかにして可能なのかという問題である。通常の推論能力を持つ主体がこれらの信念を同時に持つとすれば、その主体は矛盾する内容の信念 $B(P \wedge \neg P)$ を持つことになるはずだと考えられる。しかし、そのような信念を持つことは不可能である。それゆえ、通常の主体は、 $B(P)$ と $B(\neg P)$ を同時に所有することはなく、それらのいずれかを放棄するはずである。しかし、標準的枠組みでは、自己欺瞞の主体はいずれを放棄することもなく $B(P)$ と $B(\neg P)$ を同時に所有していると理解される。このようなことがいかにして可能なのだろうか。

これに対して、動的パラドクスとは、自己欺瞞という意図的行為をいかにしてやり遂げることができるのかという問題である。誰かを意図的に欺くためには、欺こうという自分の意図に気づいていなければならない。しかし、誰かがそれによって欺かれるためには、欺く側の意図に気づいてはならない。それゆえ、自らを意図的に欺くと同時に自らに欺かれる自己欺瞞の主体は、自らを欺くという意図に気づいていると同時に気づいていないのでなければならない。しかし、このようなことがいかにして可能だろうか。

それでは、以上のようなパラドクスに対して、どのように対応すればよいのだろうか。近年の傾向として、静的パラドクスを解消するために $B(P)$ と $B(\neg P)$ を同時に所有しているという標準的理解を否定する論者が増加している。他方、動的パラドクスに関しても、そもそも自己欺瞞が意図的なものであるという標準的理解を否定することによってパラドクスを解消しようとする論者が増加しているというのが近年の傾向である。つまり、P と強く欲するあまりに、非意図的なふるまいとして、ついつい都合の良い証拠にばかり目が向くなどの証拠の操作をしてしまった結果、 $B(P)$ を形成してしまうのが自己欺瞞だということである。

しかし、われわれが「自己欺瞞」と呼ぶ現象のすべてが、そのように理解でき

るものなのだろうか。私は、われわれが「自己欺瞞」と呼ぶ現象には、あくまでも標準的枠組みで理解されるべきものがあると考えている。しかし、以上で見たように、標準的理解はパラドクスに直面してしまうように思われる。いかにして、パラドクスを回避することができるのだろうか。本発表では、標準的枠組みで理解されるべき自己欺瞞の存在を前提した上で、標準的理解の下でパラドクスを回避する可能性を探ることを目的とする。

標準的理解の下でパラドクスを回避しようとする一つの考え方は、心の領域を、自己欺瞞に陥った主体にとって隠された領域と隠されていない領域に分割する「心の分割」という考え方を自己欺瞞の理解の中に導入することである。この考え方によれば、自己欺瞞に陥った主体が $B(\neg P)$ とともに $B(P)$ を所有するに至ったときには、 $B(\neg P)$ が主体から隠されてしまい、直接的な自己知の対象ではなくなる。それゆえ、 $B(P \wedge \neg P)$ は生じずに済む。また、自らを欺いて P と信じさせるといふ意図 $I(B(P))$ も主体から何らかの形で隠され、直接的自己知の対象でなくなることによって、自らを欺くといふ意図的行為をやり遂げることが可能になる。

しかし、心の分割の議論に対しては、一般に、次のような批判が容易に思い浮かぶ。心の分割が生じた主体は、二人の主体に分裂していて、もはや「自己」欺瞞ではないことになるのではないだろうか。「心の分割」は、心を直接的な自己知が成立する領域と成立しない領域に分割する。そして、ある心的状態に対して直接的な自己知が成立しないということは、その心的状態には主体のコミットメントがないということの意味する。この意味で、その心的状態は主体にとって文字通り「自分の」心的状態であるとは言えないのではないだろうか。そのような心的状態はせいぜい、自己欺瞞において欺かれた側の主体とはあくまでも別の主体として捉えられる、欺いた側の主体に属すると考える他ない。以上のような意味で、「心の分割」を心の隠された領域と隠されていない領域への分割として理解することは、自己欺瞞の主体を「欺かれた側の主体」と「欺いた側の主体」へと分裂させてしまう。それゆえ、標準的理解の下でパラドクスを回避しようとして心の分割を導入する限り、自己欺瞞はもはや文字通りの「自己」欺瞞としては理解できないことになってしまうように思われるのである。

この限りでは、自己欺瞞のパラドクスを完全に回避することはできないと認めざるをえない。しかし、自分のコミットメントがあるという意味とは別の意味において、 $B(\neg P)$ を「自分の」心的状態と呼べるような余地は残っていないのだろうか。本発表では、「自己」の概念が、主体のコミットメントという観点だけでなく、その他の観点からも捉えることのできる多面的な概念であり、他のある観点から見れば、自己欺瞞を文字通り「自己」欺瞞と呼ぶことができるということ、つまりこの限りで、自己欺瞞のパラドクスを部分的には回避できるということを示したい。結論を先取りすれば、標準的枠組みで理解されるべき自己欺瞞は、主体のコミットメントという観点から見れば文字通り「自己」欺瞞と呼ぶことができないが、心的状態の合理的ネットワークという観点から見れば文字通り「自己」欺瞞と呼ぶことができるような現象である。私は、このような自己概念の多面的なあり方をそのまま捉えることこそが、自己欺瞞の正しい理解であると考えている。